

日本の神々と祭り

神社とは何か？

主催 人間文化研究機構 国立歴史民俗博物館
特別協力 島根県古代文化センター（島根県立古代出雲歴史博物館）
会期 平成18年3月21日(火)～5月7日(日)
会場 国立歴史民俗博物館 企画展示室
 千葉県佐倉市城内町117番地 TEL：043-486-0123(代)



国宝 秋野鹿時絵手箱（出雲大社蔵）



出雲大社境内遺跡出土の玉類（出雲大社蔵）

古代以来、時代ごとに大きな変化を経ながら現代まで息づいている神社には、高い文化的・学術的価値があり、日本文化研究の上からも重要な位置を占めています。

近年の研究では、神社の機能をいわゆる神をまつる場所として、信仰や宗教上の歴史的文化的施設とみるのみならず、幅広い視野から捉え直す傾向があります。そこで、国立歴史民俗博物館では、神社の立地や環境から環境保存機能や公園的機能、また建造物維持の上では建築・工芸の技能保存伝承機能、豊富な宝物類からは美術館・博物館・図書館などの機能、祭礼からは儀礼や芸能の保存伝承機能、さらには観光資源としての機能など、神社をきわめて多面的な機能を有する豊かな文化的有機的な構造物とみる視点にたって共同研究が行われました。この共同研究には、島根県古代文化センター職員も参画しました。

展示では、神社の成立と歴史、神々に捧げられてきた御神宝の意味、都市における神社と祭礼の諸相、という三つの視点に主軸をおき、具体例として出雲大社・伊勢神宮・厳島神社・祇園八坂神社等の文化的意義についての研究成果が紹介されます。

出雲大社を展示する第一室では、「古代の出雲世界」「古代の神社と神話」「出雲大社とその歴史」「出雲信仰の広がり」をテーマとします。荒神谷・加茂岩倉になぜ大量の青銅祭器が埋納されたのか、出雲がなぜ神話に多く登場するのか、巨大神殿はなぜ建てられたのか、出雲になぜ全国の神々が集うのか等といった事柄について、資料を通して来館者の皆様と一緒に考えてみたいと思います。

（松本岩雄）

疑問の 小部屋

昔はどうやって鉄を作っていたの？

日本で昔から行われてきた鉄作りの方法には、1400年以上前に始まった「たたら」があります。同じころの「たたら」の遺跡は、島根県でも邑南町や雲南市で見つかっています。「たたら」の技術は日本独自の改良が加えられながら発達してゆき、長い年月をへて江戸時代に完成されました。江戸時代の後半から明治時代にかけての島根県は、日本でも有数の鉄作りが盛んな地域となりました。明治15年（1882）には、全国の生産量12,164tの半分以上にあたる6,368tの鉄が作られていたほどです。

これだけ多くの鉄ができた「たたら」とは、どのような方法でしょうか？

まず、江戸時代以降、「たたら」の作業が行われたのは、高殿という建物です。その中には砂鉄を溶かす施設（炉）に加え、砂鉄や木炭の置き場所、炉へ空気を送り込む天秤ふいごなどがあり、一つの工場でした。普段は見えませんが、炉の地下に造られた大きな施設（床釣り）も「たたら」には欠かせなかったのです。



「たたら」のようす（島根県埋蔵文化財調査センター所蔵模型）

「たたら」ではまず、粘土のかたまりを細長い棒の形に積み上げて炉を作り、乾燥させます。その中を木炭で満たした後、さらに砂鉄と木炭を交互に入れ、天秤ふいごで空気を送り込んで木炭を燃やし、砂鉄を溶かします。この作業を3日から4日がかかりで行うと、大きな鉄のかたまり（けら）が炉の底にできたり、溶けた鉄（ずく）が炉の外へ流れ出てきます。炉の底にできた鉄のかたまりは、炉を壊して取り出しました。こうしてできた鉄（けら・ずく）は余分なものが取り除かれ、鉄の道具へ加工されていったのです。（目次謙一）

出前講座 募集のご案内

古代文化センターでは、「出前講座」を行っています。島根の歴史についてのベーシックな話題はもちろん、開館を1年後に控え急ピッチで進む島根県立古代出雲歴史博物館の開館準備の裏舞台など、ほかでは聞けない話題を盛りだくさんにご用意し、専門のスタッフがみなさまのもとへ「出前」いたします。申し込み方法は簡単。みなさまからのたくさんのお申し込みをお待ちしております。

ポイント

- ・島根県内であれば、いつでも、どこでも、何人からでもOK！※1
- ・豊富な講座メニューから選べます
- ・講師への経費は一切不要

応募方法

- (1) メニューの例を参考に、聞きたい講座・内容を選ぶ※2
- (2) 実施希望日の1ヶ月前までに、まず電話で応募する※3
- (3) 電話で、講師と、日時・会場・内容などについて打ち合わせをする
- (4) 申込書で※4、正式に手続きをする……………受付完了

- ※1 ただし、営利を目的としないグループ・団体の活動に限らせていただきます
- ※2 より詳細な内容や概要を記した案内もございますのでお問い合わせ下さい
- ※3 講師の都合により、御希望に添い加える場合がございます
- ※4 申込書の様式を準備しておりますのでお問い合わせ下さい

◆講座メニューの例 ※ここにはない内容でも実施できることがありますのでご相談下さい

I 島根の歴史にふれるシリーズ

1万年以上におよぶ島根びとの歴史をひもときます

- 1 僕らの祖先がやってきた～旧石器時代の暮らし
- 2 縄文人、海へ山へ～縄文時代の人々の暮らしと交流
- 3 王墓誕生～四隅突出型埴輪墓とその時代
- 4 全国ブランド・出雲の玉つくりについて
- 5 古代の国づくりと庶民の暮らし
- 6 世界にはばたく石見銀山
- 7 島根のたたら製鉄
- 8 世界をみていた島根人～江戸時代の国際派達
- 9 ちょっと昔のあなたのまち～写真と映像でみる昭和の暮らし

II 出雲大社と神々の国のまつりシリーズ

人々と神、祈りに関する歴史を考えます

- 1 巨大神殿の復元～いにしへの出雲大社
- 2 中世の出雲大社～尼子時代の出雲大社と杵築のまちなみ
- 3 出雲大社の本殿の中の世界～出雲大社三月会屏風をもとに
- 4 出雲の神在祭～神々が集まる証にせまる
- 5 神々への捧げもの～社寺に奉られた御神宝

こんなときに
・公民館活動で
・各種サークルの仲間で
・研修会の講師で など

出雲神楽をみたら、石見の神楽とはちがって、びっくしたの。どうしてあんなにちがうのかしら…。

子どもたちに「出雲神話」の読み聞かせをしたいけれど、わたしたちがまずは勉強したいな…。



子ども会のイベントで古代体験させたいけど、どうやってやるのかな。

III 出雲国風土記の世界シリーズ

「出雲国風土記」をもとに、古代人の暮らしに迫ります

- 1 プロジェクト・FUDOKI～原本出雲国風土記を復元せよ！
- 2 古代の雑踏へタイムトリップ
- 3 古代のムラを復元する
- 4 古代出雲、愛の物語
- 5 風土記の舞台の古代といま

IV 青銅器と金色の大刀シリーズ

弥生時代から古墳時代についてじっくりまなびましょう

- 1 銅鐸の絵から何がわかるか
- 2 青銅の輝きと弥生人
- 3 弥生時代山陰は青銅王国だったか
- 4 威風堂々 額田部臣
- 5 西のイズモ・東のイズモ

V 出雲神話と神々シリーズ

出雲を舞台とした神話についてその成り立ちや歴史を学びます

- 1 子や孫に語る出雲神話～入門！ 出雲神話
- 2 古代人が考えた神々のすがた～考古学と古典をもとにせまる
- 3 神々の舞・神楽を見る目
- 4 村祭りや神話世界～近世村落の形成と神話の役割
- 5 北ツ海をめぐる神話～東アジア各地の神話と出雲神話

VI えうご期待！ 古代出雲歴史博物館

新博物館の見どころや急ピッチで進む準備の裏舞台をかたります

お申し込み・お問い合わせ先

島根県古代文化センター 出前講座担当
TEL 0852 (22) 6726 (8:30～17:00)
FAX 0852 (22) 6728
Email kodai@pref.shimane.lg.jp

編集発行 平成18年3月16日

島根県教育庁古代文化センター

〒690-0887 島根県松江市殿町1番地 島根県立博物館内
TEL 0852-22-6727 FAX 0852-22-6728

URL <http://www2.pref.shimane.jp/kodai/>
http://nextdmuseum.pref.shimane.jp/shimane_2.htm
<http://www.pref.shimane.jp/new/inishie/>
e-mail:kodai@pref.shimane.lg.jp



News vol.18

2006.MAR

島根県古代文化センター

松江市平所遺跡出土（重文：見返りの鹿植輪）



新収蔵資料

本朝振袖之始、素戔嗚尊妖怪降伏之図

葛飾北輝（幕末）

近松門左衛門の「日本振袖始」を題材にして描かれたもので、イナタヒメがかざす鏡の光に屈服し、スサノオに手形を押した詫び証文をさしだす妖怪たち。なぜスサノオは、ヤマタノオロチではなく、妖怪をこらしめているのでしょうか？

奈良時代の『備後国風土記』には、古代、スサノオは疫病をはらう方法を教えた神として紹介されています。中世には仏教の守護神のひとり・牛頭天王と同じ神とされ、疫病封じの神として絶大な信仰を集めました。古来、流行病のなかでも「はしか（麻疹）」は、天然

痘とともに恐れられていました。とりわけ文久2年（1862）の大流行では、江戸の町だけでも1万人以上の死者を出しました。当時の人々はスサノオをはじめ、神や仏などを描いた錦絵を家に貼って感染をまぬがれようとした。こうした錦絵を「はしか絵」といいます。

それにしても、この絵に描かれている疫病神たちはカワイイですね。どんなに大変なときでもユーモアを忘れない江戸時代の人々に、力強い心意気を感じてしまうのは私だけでしょうか？

（岡 宏三）



マスコットキャラクターも決定しました。よろしくお願ひします。

『古代出雲歴史博物館』建築工事完了！

古代出雲歴史博物館の建築工事が12月21日で完了し、完成した建物が県に引き渡されました。3月には庭園等外構の工事も完了し、4月からは開館準備のため博物館スタッフが常駐します。

建物の完成後、周辺自治会の見学会、埋文センター主催のいにしえクラブ等、いろいろな機会に、一般の方々に施設を御覧いただいています。施設見学では、展示室やエントランス棟、収蔵庫等を御案内しています。

既に据え付けられている展示物は出雲大社の千木、勝勇木等わずかですが、工事中の展示室内では開館後の展示を思い浮かべていただき、広い特別展示室を活用した企画展が楽しみという声もいただきました。

また、収蔵品搬入後には一般の人が入ることのできない収蔵庫も、今だけということで見えていただき、重厚な耐火扉等の設備から、歴史資料を守り後代に伝えるという博物館の使命についても御理解を深めていただけたことと思います。

3月18、19日には開館1年前イベントの一環として、施設の見学を予定していますので、多くの方の来館をお待ちしています。

また、12月には、歴博の指定管理者として、ミュージアムいちばた（一畑電気鉄道・丹青社・近畿日本ツーリスト共同事業体）が、県議会で指定されました。歴博の管理・広報等については指定管理者、展示の企画・収蔵品の管理等については県スタッフという役割分担で館を運営していきます。

歴博の開館日も平成19年3月10日（土）に決定しました。平成18年度も開館に向け、展示工事、情報システム工事を継続していくとともに、広報活動、運営体制固め等の準備を進めています。

エントランス棟



展示ロビー



テーマ展示室



収蔵庫



(歴博平面図と見学の様子)

古代文化センターの組織改正について

昭和59、60年に荒神谷遺跡で大量の青銅器が発見されたのを契機として、平成4年度に、県の設置する研究組織としては全国的に稀な「古代文化センター」を創設し、以来、島根の古代文化に関する調査研究を積み重ねるとともに、古代出雲歴史博物館と古代文化研究センター（仮称）の整備を推進する組織として、スタッフは年々拡充され、今年度は、16名の専門スタッフと8名の事務スタッフで業務を推進してきたところです。

古代出雲歴史博物館は、平成17年度末に建物本体・外構工事が完成し、平成19年3月の開館に向けて展示等総仕上げの段階に至っています。

一方、古代文化研究センター（仮称）については、財政上の観点から、平成15年5月の建設延期に続いて、再度の建設延期が決定されるとともに、当面現博物館を活用して調査研究を継続する方針が昨年11月に打ち出されたところ

です。こうした状況を踏まえ、古代文化センターは、平成18年度、次のような組織改正がなされます。

1. 組織として、「古代出雲歴史博物館」を設置して、開館に向けた業務を実施する。
2. 古代出雲歴史博物館の設置にともない、古代文化センターの規模を縮小し、文化財課の内室として、調査研究活動を継続する。

古代文化センターのスタッフは二つの組織に分かれて業務を行うこととなりますが、両組織は、展示等博物館開館のための諸準備や調査研究活動の継続に向け、密接な連携を図りながら業務を推進していくこととなります。

また、古代出雲歴史博物館については、県スタッフと指定管理者である「ミュージアムいちばた」が協働しながら施設運営を行うこととなります。

歴博の展示紹介

神話展示室から

「出雲神話回廊」の制作現場から

あなたは、出雲の神話を知っていますか。「古事記」によれば、出雲及び出雲に関わる地域を舞台とした出雲系神話は、全体の3分の1の分量を占めています。また、『出雲国風土記』には国引き神話など個性豊かな神話が載せられています。

これらの神話は、書物に書かれて残ったものですが、神話はもともと祭りや儀式のような神聖な場で語られる物語でした。神話展示室では、このような神話の雰囲気に親しんでもらおうと、シアターに語り部が登場します。この語り部にいざなわれながら、大画面では、ササノオのオロチ退治など迫力あふれる神々の壮大な叙事詩が展開するのです。



奥飯石神楽

続く展示室では、天皇の面前で神話を語った出雲国造の姿をCGで再現すると共に、神話に登場する神々のイメージの変遷について古文書や絵画、神楽などの映像によって明らかにします。神話は常に変化するのです。

また、世界各地の神話や東アジアの神話についても映像で再現します。ひょっとしたら我々が作っている展示自体が新たな神話の創造と言えるのかも知れません。しかし、ややもすれば敬遠されがちな神話を親しんでいただけるきっかけが出来れば、担当者にとってこれだけ幸せなことはありません。皆さん、ぜひ神話展示室で出雲の神々との一期一会の出会いをしてください。

(森田喜久男)

調査研究事業☆最新情報

社寺調査研究から



◆大社造の起源と変遷を探る

出雲大社の高大な本殿に代表される独特の神社建築を「大社造」と呼びます。伊勢神宮の神明造などと共に古代にさかのぼる建築様式とされてきました。今日知られる典型的な「大社造」といえば、切妻造り、妻入りで9本柱が「田」の字型に配置されることや中央柱（心柱）が床を貫き天上方向へと伸びていることなどが大きな特徴とされています。

しかし、この「大社造」、果たして、いつどこで成立し、どのような変遷をとげて今に至るのでしょうか。未だ多くの謎に包まれています。

当センターではその謎に迫るべく、およそ3年前から県内外の研究者と共に、現存する「大社造」を拝観調査し、遺跡から発掘される特殊な掘立柱建物跡の事例や後世の文献記録、絵図などの諸情報を収集、整理してきました。昨年9

月には、鳥取環境大学浅川研究室（浅川

滋男教授、建築学）と共に、その成立と変容をめぐる最新研究を総覧する学術シンポジウムを開催しました。考古学、建築学、文献史学等を専門とする研究者が一同に会し、のべ2日間にわたる活発な議論を展開しました。その結果、これまで不明な点の多かった古代の「大社造」の様相が徐々に明らかになりつつあります。現状での研究成果は、来年度、刊行物やおおよそ1年後に開館予定の県立古代出雲歴史博物館の展示において発表する予定です。今後の研究動向にどうぞご期待下さい。

(錦田剛志)



活発な議論が交わされた

古代文化センター テーマ研究より

社寺参詣をめぐる多角的研究

テーマ研究「社寺参詣をめぐる多角的研究」は今年度から始まった調査研究事業です。この事業では、おもに「出雲の札所めぐり」を対象とした研究をおこなっています。出雲の札所めぐりは江戸時代にさかんにおこなわれました。第一番の長谷寺（出雲市大社町）から三十三番の清巖寺（松江市玉湯町）まで、徒歩でおよそ1週間かけてまわったようです。現在でもこの札所めぐりは息づいていますが、さすがに徒歩でめぐる人は少なくなりました。このテーマ研究では、当センターの研究員が、実際に徒歩で三十三の札所をめぐって調査をしています。こうして、ゆく先々のお寺の状況について調べるとともに、お寺とお寺を結ぶ道や路傍の石造物などについても調べています。こうした調査によって、社寺をめぐる人々と、それをささえた地域の社会などを総合的に理解していきたいと思っています。

また、出雲と石見の札所の寺院に伝来する文化財調査もあわせて計画しています。

平成20年度、この研究の成果をいかし、古代出雲歴史博物館で特別展示をおこなう予定です。ご期待ください。

(椋木賢治)



調査の様子